

# 与論島の活性化のために

理学部 生命化学科 1 年

2217530487 若松沙姫

私は今回の講義を通して初めて与論島を訪れた。それまでの与論島のイメージといえば、鹿児島本土と最も離れており、豊かな自然が数多く残る島といった感じであった。実際に訪れてみると、イメージ通りの白い砂浜や透き通った海、南国特有の植物を島のあちこちで見ることができた。しかしそれに加え、土産店や居酒屋が軒を連ねる賑やかな商店街や、海岸に建てられたモニュメントなど観光に力を入れているという一面も新たに発見することができた。与論島は沖縄の復帰以前に日本最南端の島として注目されはじめ、1978 年には 15 万人もの観光客が訪れている。しかし、それ以降は沖縄の観光客増加や大型台風の直撃、また海外旅行がより身近になったことにより観光客の減少が続いた。近年では、多くのメディアが百合ヶ浜を取り上げたことや、SNS での知名度の普及により観光客が徐々に増えつつある。そんな与論島がこれからさらに活性化するために必要な取り組みを、今回の講義で学んだことを元に 3 つ考えてみた。

1 つ目は、インフラの整備である。今回、与論島へは船で行ったのだが、およそ 20 時間の長旅であった。飛行機もあるが、鹿児島-与論間は一日に 1 便しかなく座席数も限られているため、現在はイベント時などに臨時便をだすことで対応しているようだ。しかし観光客誘致のためには、観光シーズンである夏を中心にもっと飛行機や船の便数を増やすべきだと思う。さらに、もう少し値段を引き下げることができればより身近になり、訪れやすくなるのではないだろうか。また実際に散策してみて、観光客にとって目印になる看板が少なく、夜になると真っ暗な道が多いように感じた。これは、地元の方にとっても危険なのではないだろうか。そこで、大通りに観光スポットへの行き方を示す標識を設置する、一定間隔で街灯をつけるなどの対策をとる必要があるのではないかと思う。さらに、宿泊施設を充実させることも重要である。1978 年には数多くの宿泊施設があったが、観光客の減少に伴い次々と撤退し、現在あるリゾートホテルはプリシアリゾートのみである。その他、民宿のようなものはいくつかあるが、老朽化が問題となっている。宿泊施設でのおもてなしも観光コンテンツの一つであるので、現在ある施設の修繕を行ったり、新しくホテルの誘致を行ったりし、観光客が快適に過ごせるような工夫を行うべきではないか考える。

2 つ目は、新たな観光資源の開発である。ヨロン島観光協会の方の話によると、2020 年までに観光客を 10 万人にすることを目標としているようだ。ただ、与論島は小さな島であるため、全盛期には観光客が集中し、水不足や大量のゴミなどといった様々な問題が起こ

ったようである。そのような問題を起こさないためにはベストシーズンである夏だけでなく、それ以外のシーズンにどれだけ集客をあげられるかが重要である。地元の方と話していると、百合ヶ浜だけを目的として与論島を訪れる観光客も多い、ということがわかった。私自身、与論島に行くまでは観光スポットというと百合ヶ浜しか知らなかった。しかし、百合ヶ浜以外にも多くのビーチがあり、加えてダイビングスポットとしての沈船あまみや海中宮殿、与論城跡、民俗村、十五夜踊りやシニグ祭り等の伝統文化など観光客にアピールすべきポイントが多くあると感じた。これらをメディアや SNS を有効活用して積極的に発信していくことで、いつ来ても魅力的な島、何度も訪れたい島になるのではないだろうか。

3つ目は、若者の雇用拡大である。現在与論島では少子高齢化が進んでいる。それに加え、高校進学や就職を機に与論島を離れてしまう若者が多くいるそうだ。与論島がこれからさらに活性化するためには、若者の流出を防ぎ、IターンやUターンの受け入れも増やしていく必要があるだろう。具体的な職業を述べると、観光農園や特産品の加工場の職員、ホテル従業員などである。特に、加工場については漁業や農業と提携し新しい商品を開発することができるし、加工することで島外への輸出も容易になり、与論の特産品を多くの人たちに知ってもらいきっかけにもなるだろう。

以上が、私が与論島をもっと活性化させるためにすべきだと考えたことである。繰り返しになるが、今回初めて与論島を訪れ、美しい海はもちろんだが、おいしいご飯、沖縄と大和両方を受け継いだ伝統文化など数多くの魅力に気づくことができた。それになんといっても、島の方々がとてもあたたかく、私たちと積極的にコミュニケーションをとり様々な情報を教えてくださったので、嬉しかった。また、綺麗な与論を守ろうと自主的にゴミ拾いをしている若い人たちもいるということを知った。人の良さが与論島の一番の魅力だと思う。4日間という短い間だったが、与論島は素敵な島であると身をもって知ることができ本当によかった。今後もし機会があるならば、もう一度与論島を訪れたいと考えている。